

森有正著「生きることと考えること」講談社現代新書 講談社 1970年11月16日刊を読む

### 試験の制度そのものが教育の根本に

1. フランスの教育について考えるばあい、その試験制度という見逃すことのできないものがあります。
2. 学士になるとか、あるいは高等教育検定とか、その年の国家試験のばあいには、一年まえに、試験の範囲が全部報告されるわけです。
3. (1)たとえば、フランス文学史の17世紀なら17世紀を勉強してこいとか、どういう著者を勉強してこいとかの指示があります。  
(2)それを一年間、けんめいに勉強する。そうして先生から題を一つ与えられて、勉強したことをもとにして作文を書くわけです。  
(3)そういうやり方を通して、フランス語を読み、かつ練習をしているわけで、試験制度そのものがもうすでに一つのフランスの教育のいちばん根本の点、つまり単に知識をコントロールするというのではなくて、試験を準備させることによってその人に勉強させるというやり方をとっているのです。  
(4)いい意味での試験勉強です。  
(5)ソルボンヌなんかでも、先生は、文部省が発表したその年の試験の問題になるべく近いようなものを講義するわけです。
4. (1)これにくらべると、教育という面では、日本の教育は完全に受動的だといえます。  
(2)本を読み、何々を知り、何々を見、何々を理解する、という形で終わりですから。  
(3)ところがフランスは、もちろんそれもあるけれども、さらに、勉強して知ったことにたいして判断をくだし、それを発表するというところに、非常な重点がおかれているのです。ほとんど日本で想像できないくらい大きく重点がおかれている。  
(4)フランス語の授業は、ほとんど全部作文の練習といってもいいくらいです。
5. (1)しかし、そのフランスの学生たちにも、日本のような受動的な面が出てきています。  
(2)いまフランスでは、しきりに試験を全廃しろといっています。  
(3)平常点でもってつける。  
(4)つまり、普段たえず練習問題に先生が点数をつけて、試験のときにはそれを総計して計算すればいい。  
(5)そういうことがいわれています。  
(6)だから、今年も平常点でやった先生もずいぶんたくさんいますが、それはどういう試験をしてもいいということなのです。

(7)平常点で試験をしてもいいし、あるいは別に試験をオーガナイズしてやってもいいし、文部省は各プロフェッサーの自由裁量に任していますから。

(8)しかし、どちらの方式をとるにしろ、フランスの根本的な精神は変わってないわけです。

6. (1)つまり、伝統を受け継ぐと同時に、自分の経験をこんどは発表して、それを伝統的な表現手段を通じて発表する。

(2)そこにひじょうな重点を置いているのです。

(3)そういうふうにして、自分の「経験」と「伝統」とを結びつけるというひじょうに大きな人間形成の役割を果たしているわけです。

(4)日本では教育のばあい、どうもそこまではっきり見通していないと思うのです。

### 〈発表能力の養成という主眼は不変〉

7. (1)ただしこれは、フランス文化独特の理想であって、それがどこまで普遍性をもつかは一応別問題です。

(2)一方ではギリシア・ローマ的な文化・伝統というものがずっと生きていると同時に、一方においてはアメリカやロシアのような技術を主として追究する新しい文明というのがあって、そういう争いはフランスの社会にもたくさん起こっています。

(3)たとえば、これからもラテン語をやるか廃止するかという問題がそうです。

(4)テクニク(技術)教育を重んずる人は、教えなければならないことがたくさんあるのに、ラテン語をやっているのはもってのほかだ、あんなものはやめて、英語とフランス語にして、あとはもっと実際のテクニクの知識を与えなくてはいけないという。

(5)すると一方では、むしろそういう技術の知識をほんとうに消化し、それを統一するために、古典の知識が必要だから、ラテン語もギリシア語も絶対にやめてはいけないという。

(6)フランス語の勉強のしかたにしても、すべてにそういう古典的な教育のしかたと新しい産業社会の教育のしかたとが、激しく対立しています。

8. (1)そして現実に、中学校のラテン語は、ひじょうに大幅に随意科目のほうにまわっています。

(2)もちろんなくなりほしくないけれども、時間をある程度へらすことができるようになった。それも、実際に新しい数学など教えることがたくさんあるし、生徒の時間にはかぎりがあるから、しかたがない面があるわけです。

9. (1)ただ、フランスのばあい、そうした対立があるにしても、日本のばあいとは本質的にちがうのです。

(2)日本のばあいには、生徒の発表能力を養うという勉強はほとんどされていない。

(3)ところがフランスでは、発表能力を養うことをどこまでも主眼とし、ラテン語もそのために必要とされるわけです。

(4)しかし、それにはフランス語の教育だけで十分だ、むしろフランス語だけやったほうがよい、という見方もあって、その結果、ラテン語の時間の削減ということも生じているわけです。

### 〈哲学教育の驚くべき徹底〉

10. (1) 私自身がフランスへ行って、はじめて出会ったいちばん大きな問題は、哲学科の教育の徹底ということでした。
- (2) ひじょうに徹底した中等、高等の哲学の教育があつて、みんなその基礎の上に立ってデカルトでもパスカルでも、カントでも勉強する。
- (3) これが、日本のばあいはほとんどゼロです。
- (4) 日本の中等教育には、哲学というのがあるけれども、哲学にならない。哲学というのがおかしいくらいで、日本では大学で皆やり直しているわけです。
11. (1) ところがフランスでは、中学校の最高学年の哲学教育は実に徹底したものです。
- (2) たとえば哲学の用語や哲学の主要概念などについての非常に細かい教師の説明と、それから哲学の主要テキストの読解がある。
- (3) そういう土台をもち、その上でやる。
- (4) ですから、日本よりも先生の指導の役割が大きい。論文の主題も全部先生が選び、それによってやっていく。
- (5) 日本ほどテストはパーソナルではなくて、もっと先生自身によって管理されているという面が強い。
12. (1) たとえば「時間」の問題にしても、そのためには、すでに中学校の哲学科で扱っている「時間」の問題が膨大な分量あるわけで、それを全部、もう一ぺんやり直しました。
- (2) ベルクソンとか、ハイデッガーとか、そういう人の主要なテキストの、せめて学校用エキストラだけでも正確に読んでおかなければいけないわけです。
- (3) つまり、向こうの論文というのは、論文を書くと同時に試験ですから、だれでも常識としてもっている問題についても質問が出るわけです。

P142 ~ 148

— 2017年6月11日(日)林明夫—